

Title	「つかの間の幸せを捕える」ことができただろうか
Sub Title	Have I succeeded in 'achieving fleeting happiness' in life?
Author	真壁, 利明(Makabe, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.10, (2009. 12) ,p.1- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000010-0010

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Newsletter

2009 December No. 10



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

Contents

「つかの間の幸せを捕える」ことが
できただろうか

Have I succeeded in 'achieving
fleeting happiness' in life? 1

2009年度 Keio-Cambridge Joint
Seminar 報告

Keio-Cambridge Joint Seminar in
2009 2

2009年度 Keio-Cambridge Joint
Seminar に参加して

Report of the Keio-Cambridge Joint
Seminar

Gachon 大学セミナー報告
Keio-Gachon NRI Joint Seminar 3

グローバル COE 共催シンポジウム
「心に関する全日本ネットワークの構築」
Symposium by Global-COEs
“Organizing a Japanese Network on
Kokoro (mind)”

第2回人間知性研究センター
シンポジウム

The 2nd Symposium of Research
Centre for Human Cognition 4

マギル大学と海外提携

Our new International Collaborator:
McGill University

拠点リーダー中国科学院
(生物物理部門) を訪問

Visit to the Chinese Academy of
Sciences, Institute of Biophysics

夏季コース報告 国際交流
—「教わる」から「教える」へ—

International Exchange: From “Learn”
to “Teach” 5

プロジェクト科目の紹介

Project Course: Education and Research
Programs at CARLS

脳の講習会始まる

Seminar Series on Brain Science has
started 6

活動報告・研究員紹介 7

事務局だより 8

「つかの間の幸せを捕える」ことができただろうか Have I succeeded in 'achieving fleeting happiness' in life?

真壁利明 慶應義塾常任理事

Toshiaki Makabe Vice-President, Keio University. Professor



米国に私の年齢と開催回数を同じくする学会がある。今年
はニューヨーク州の田舎 Saratoga Springs で紅葉の時期に開催され
た。招待講演を終えホテルの部屋へ戻ったところに「論理と感性
の先端的教育研究」GCOE 拠点から原稿依頼のメールが届いた。
一研究者の心境を会場から綴らせて頂くことにする。

私の所属する応用物理の一部門では、マイクロ波通信、気体レー
ザ、半導体微細加工、環境バイオと、およそ互いに関連の薄い
研究対象がほぼ20年間隔で出現している。これらの対象は「低
温プラズマ」が一つの鍵となる科学技術で、研究費の初期投資→
研究者の増加→競争的研究費の増加→若手研究者の育成へとつ

ながり、科学技術の爆発的な発展に結びついてきた。地味な基礎研究を続けてきた一握りの
研究者の下に、多様なスキルを持った研究者が集い、研究のバックボーンが描かれロードマッ
プが定まりブームが起こるのである。人種を超え、国境を超え、分野を超え、世代を超えて
集まった研究者は、自らが育った環境の影響を陰に陽に生かしながらスキルを磨き第一人者
へと成長してゆく。その研究対象は20年～30年後に、一見すっかり掃除の行き届いた知識
状況をつくりだし、その科学技術が常識化され文化の発展に貢献してゆく。この一連のプロ
セスを、すでにルネッサンス期の巨匠ダントは「考えているだけでは不十分だ。これを言葉で、
文章で、実験で実証して、初めて知識・学問 (Science) となる」と表現している。

研究は無味乾燥としたものと想像されがちだが、実際の研究者が生きているのはダイナミック
で人間くさい世界だ。プラズマによる物質の微細加工の研究グループが活動を始めたころ、
学術用語の定義とその意味の微妙な相違から生まれる誤解など、誕生まもない融合分野なら
では戸惑いや、その奥の深さを認識する喜びを日々味わっていた。互いに夢するところを
求め、プロジェクト研究に精を出し、いつまでもこの状況が続くものと考え、苦しくも充実
感のあったあのころを懐かしく、今この会場で思い出すのである。10年、20年と時はたち学
術融合が進み、新たな分野「プラズマエレクトロニクス」が確立した。ややもすると事実ば
かりが堆積し、そのバックボーンや理念が埋もれてゆき、情報の洪水に飲み込まれそうにな
るなか、いつの間にか多くの先輩諸氏が大学や研究所を去ってゆく時期となっていた。人生
における「つかの間の幸せを捕える」ことができただろうか。同年輩のシニアメンバーがめっ
きり減ってしまったこの学会で自問自答している自分に気づくのである。一時期、私のグル
ープにEUから参加していたポスドク(当時)に久しぶりに会場で出会った。短い会話を通し
て順調に研究者の道を歩み続け、新分野開拓の一翼を担っている様子を知り、教育者として
安堵し研究者として心の和む一時を過ごすことができた。

さて、国境を意識しないグローバル化が進むなか e-Science 時代を迎え、大学における若
手研究者の育成と研究者のスキルがこれまで以上に重要となっている。残された科学の秘境
の一つ「論理と感性」に関する教育研究が、慶應義塾を中心に融合環境のもとで精力的に進み、
豊富な成果が生まれている。国際連携も充実し教育研究拠点としてのプラットフォームがそ
の求心力を増すなかで、今後の幅広い波及効果に期待してやまない。

(See next page for English summary)

2009年度 Keio-Cambridge Joint Seminar 報告

Keio-Cambridge Joint Seminar in 2009

(8月11-13日 ケンブリッジ大学)

8月13日にケンブリッジ大学の実験心理学部にて合同セミナーが開かれた。合同セミナーの開催は今年で3年目である。例年通り Nicola S. Clayton 教授と Anthony Dickinson 教授による差配の下、合計10件の発表が行われた。ケンブリッジ大学側からは、ヒトの子どもにおける目的行動の発達、カケスのメタ認知、カケスの道具使用、カラス科鳥類の社会的葛藤とその後の行動、コクマルガラスの社会的学習などの話題が提供された。一方、慶應人文 GCOE 側からは、乳幼児の音声言語知覚に関わる脳画像研究、聴覚障がい児の認知発達、ハトの視覚的注意に関わる神経機構、セキセイインコの社会認知、コモンマモセットの動機づけ研究について発表が行われた。このように発表内容は、トピック、研究手法、対象とする動物種のどれをとっても多岐にわたっていたが、それにも関わらず全ての発表に対して質問が挙がり、各発表者はそれに対するやりとりを通して自分の発表についての十分なフィードバックを得ることができた。これは、ケンブリッジ側の参加者が自分の専門分野に閉じこもらずに、心理・行動研究に対する広い関心をもってセミナーに臨んでくださったことによるところが大きかったと思う。GCOE 側の発表者のほとんどにとっては慣れない英語での発表だったが、事前に練習を繰り返したこともあり、大きな妨げはなく研究内容を伝えることができた。そのため全体として合同セミナーを成功の裡に終わらせることができたように思う。上述のケンブリッジの教授お二人のみでなく、世話役を務めてくださった Allie Watanabe さん、慶應とケンブリッジの両方の研究室に所属した経験があり今回も議論に参加してくれた神前裕君に特に感謝申し上げる。

昨年までとは異なり、今年のセミナーは2日間ではなく1日だけとなったため、セミナー前の2日間はマモセット研究施設とカラス科鳥類の研究施設の見学、そしてカレッジのひしめくケンブリッジ大学全体のツアーに充てられた。ありがたいことに2つの研究施設については時間をかけて案内していただくことができ、飼育室と実験室の配置のされ方、日々の動物のメンテナンス方法、実際の実験風景などを、大変興味深く拝見した。そして、昨年から CARLS でもマ

モセット研究室が稼働しているが、その運用について実際に動物の飼育と研究に関わっている方から貴重なアドバイスをいただくことができた。

ケンブリッジ大学は今年で創立800周年を迎えたそうである。長い歴史をもつ大学らしく、古い建物のカレッジ群は荘重な雰囲気にも包まれていた。特に図書館に収められた古い蔵書の迫力は圧倒的で、研究蓄積の重みをそのまま具象化したような背表紙の列はまさに「巨人の肩」のようだった。言うまでもなく同大学はアイザック・ニュートンやチャールズ・ダーウインをはじめとして学問史上の偉人を多く輩出している。翻って、慶應義塾にとっては昨年が創立から150年目であった。ケンブリッジ大学に比べればまだまだ若い大学と言える。今回ケンブリッジを訪ねて、GCOE プログラムの目標として掲げられる「国際的教育研究拠点の形成」という言葉が何やら背伸びのよう感じられ、650年後の慶應義塾大学に思いをはずせぬにいらなかった。

(石井 拓)

The 3rd Cambridge-Keio Joint Seminar, organized by Prof. Nicola S. Clayton and Prof. Anthony Dickinson, was held at the Department of Experimental Psychology, University of Cambridge, on August 13th. Ten studies were presented in the seminar. The topics of the studies included cognitive and behavioural development in children, neural basis of auditory and visual perception in human infants and pigeons, social cognition and behaviour in corvids and budgerigars, tool use and complex cognition in corvids, and behavioural economics in common marmosets. Despite this variability in topics, experimental subjects, and methodologies, each of the presentations provoked lively discussion. We thank the two organizers, Ms. Allie Watanabe, who helped Japanese visitors, Dr. Yutaka Kosaki, who joined the discussion, and all the presenters for this successful seminar.

1 ページ目の英訳 **Have I succeeded in ‘achieving fleeting happiness’ in life?**

It was during a meeting of a certain academic society in Saratoga Springs (New York) that I was requested by the global COE CARLS to contribute this article. In this place where the society is meeting, I intend to write about some of my sentiments as a researcher.

In a field of the applied physics to which I am affiliated, we saw emerge, at an interval of roughly 20 years, new research topics that had little relevance to each other. Through the multistep process starting from initial research investments and leading up to training of young researchers, the evolution of these research topics has contributed to explosive development of science and technology.

The researcher's world is dynamic and colored by human emotions and desires. At the beginning of our interdisciplinary plasma research group, the misunderstandings arising from differences in the definitions of technical terms in our respective

disciplines perplexed us, while the realization of the great depth that was left for us to explore gave us constant joy and excitement. As I sit in this conference hall, I recall, with some sense of nostalgia, those bygone days marked by strenuous work and a great sense of fulfillment. As time went by and the merging of our disciplines made further progress, the new field of “plasma electronics” was finally established. “Have I succeeded in ‘achieving fleeting happiness’ in life?” I find myself asking this question at the society's meeting where the attendance of contemporary senior members have declined drastically.

With the leadership of Keio University, “logic and sensibility” education and research has made significant achievements in an interdisciplinary environment. It is my sincere wish that the global COE, with its robust international partnership and cooperation, will bring about a significant ripple effect in the future.